

国際性向上ワークショップのための教材についての考察

A Study of the Teaching Material for the Workshop to Develop an International Mindset

山村 薫

YAMAMURA Kaoru

国立音楽大学の外国語コミュニケーション（英語）Ⅲの授業（中西千春教授担当）の一環として、国際性向上のためのワークショップが行われた。本稿筆者は「自己のアイデンティティを知り、他者のアイデンティティを尊重することから始める国際意識」というタイトルでワークショップを行い、ロシアによるウクライナ侵攻についての話も取り入れた。他国の人々や他国で起きている問題を学生が身近に感じ、他者のアイデンティティを尊重する姿勢、そして国際意識を持てるように、教材の一つとしてウクライナからイタリアへ避難したウクライナ人女性二人による学生に向けたメッセージ動画を作成した。本稿はこの教材についての考察である。世界の時事問題を授業のトピックとする際の留意点、また時事英語教材としての可能性も検討し、学生の異文化間能力育成、国際性向上、そして人間の成長に繋がるようなワークショップや教材の考察をした。

キーワード：国際性、ウクライナ、教材、異文化間能力、時事英語

1. はじめに

近年、国際化が益々進み、様々な教育機関においてもグローバル人材や、国際社会で生きていくための能力の育成に向けた取り組みが行われている。音楽大学の学生は西洋音楽を学び、将来、海外で演奏または海外の演奏家と共演する可能性がある。そのため、音楽大学で国際意識を持った人材を育成することは非常に重要であると考えられる。2022年度、国立音楽大学において外国語コミュニケーション（英語）Ⅲの授業（中西千春教授担当）の一環として、音大生の実状に合わせた「国際性向上のためのワークショップ」が実施された。このワークショップは「学生が様々な国の人と良好な関係を築き、コミュニケーションを取ることでできる国際的な姿勢を持った人材へと成長すること」を目的とし、音楽をはじめ多分野の専門家が講師として招かれ、様々なトピックで行われた。その中の一つとして、本稿筆者は「自己のアイデンティティを知り、他者のアイデンティティを尊重することから始める国際意識」というタイトルでワークショップを行った。その内容の一部に、ロシアによるウクライナ侵攻についての話を取り入れ、そのための教材を作成した。本研究の目的は、国際性向上のためのワークショップのために作成した教材について考察することにより、ウクライナ情勢をはじめとする時事問題を通して、学生がより高い国際意識を持ち、国際人として生きていけるような授業の取り組みができる教材についての考察、更に時事英語教材としての可能性を検討することである。

2. ワークショップのための教材

2-1. アイデンティティの尊重

世界には多様な文化、習慣、そして価値観を持った人々が存在する。国際社会で生きていく上でまず大切なことは、自分のアイデンティティを知ることであると考えられる。しかしアイデンティティは自分が置かれた環境、そして出会った人や出来事によって少しずつ変化していくものだろう。本稿筆者が2022年4月27日に行った国際性向上のためのワークショップでは、まず筆者が他国で経験したことをはじめ、海外で自分の常識が他者の常識で

はないと感じた時の話、自分の価値観が崩れた出来事や出会いについて話した。そしてそれらの経験を通して、自分の考え方やアイデンティティが変化していったことを説明した。最も大切なのは自分の考えを貫くだけではなく、自己のアイデンティティを探究する姿勢を持ちながらも、自分とは違う考えや価値観、文化を持つ人々に対して柔軟であること、そしてそれらの人々のアイデンティティを尊重することだろう。このような姿勢を持つことにより、自分自身の人間的成長や自己のアイデンティティを確立していくことにも繋がるのではないだろうか。

Deardorff (2006) は「高等教育における国際化への取り組みにおいて有意義な成果の一つは、異文化間能力のある学生の育成である」(筆者訳)と述べている (Deardorff 2006, p. 241)。Deardorff は異文化間能力 (Intercultural competence) の定義や評価方法についての研究を行い、異文化間能力の定義に加えて具体的な要素を22項目記している (ibid., pp. 249-250)。その中から数例を以下に示す。

- ・ Understanding others' worldviews (他者の世界観への理解)
- ・ General openness toward intercultural learning and to people from other cultures (異文化学習や異文化の人々に対する全般的な開放性)
- ・ Flexibility (柔軟性)
- ・ Deep knowledge and understanding of culture (one's own and others') (自己と他者の文化に関する深い知識と理解)
- ・ Respect for other cultures (異文化の尊重)

これらの要素をまとめると「他者の文化や世界観を理解し、尊重する柔軟性や開放性」であり、それはすなわち「他者のアイデンティティの尊重」である。このような姿勢を持つことが平和な国際社会、そして友好関係を築くための第一歩なのではないだろうか。ロシアによるウクライナ侵攻は、正にウクライナ人に対するアイデンティティの侵害とも言えるだろう。このような考えからウクライナ情勢の話ワークショップに取り入れた。

Deardorff は「開放性、尊重(全ての文化を大切にする)、好奇心と発見(曖昧さを許容する)の姿勢が異文化間能力の基本とみなされる」(筆者訳)と述べている (Deardorff 2006, p. 255)。異文化間能力を発達させるためには様々なプロセスや経験が必要であるが、まずは基本となるこれらの姿勢を持つことが大切だろう。

足立は Chickering & Reisser (1993) が提案した学生の大学教育における7つの成長領域を Evans (2003) が記したリストに、留学の場合の成長を加えた内容をまとめている (足立 2010, pp. 82-84)。その領域の一つである「アイデンティティの確立」に「自分とは様々な面で異なる人々の中に身を置くことにより、自己の特徴がより明らかになることがある。特に、自己の文化・民族的アイデンティティの確立が促進される例が顕著である」(足立 2010, p. 83)と記述されている。学生が日常生活の中で、自分の国民性やアイデンティティについて考える機会は多くないだろう。留学と同じ学びや成長を求めることは難しいが、ワークショップを通して自分とは違う文化に触れることにより、学生が自己のアイデンティティについて考え、他者のアイデンティティを尊重する姿勢を持つことを目指した教材を検討した。

2-2. 教材作成, 手順

国際性向上のためのワークショップの準備をしていた2022年3月、ロシアによるウクライナ侵攻のニュースは大々的に報道されていた。この一連のニュースを他国の自分とは無関係の出来事として捉えるのではなく、身近に感じ、考えてもらいたいという願いから、この悲惨な現状の中で生きているウクライナ人の「生の声」を聞いてもらう方法を考えた。そこでワークショップの教材の一つとして、ウクライナから当時イタリアに避難してい

たウクライナ人女性二人によるメッセージ動画を作成することに至った。彼女らは「国立音楽大学の学生にウクライナで起こっている現状を知ってほしい、そして他国のこととは思わずに考えてほしい」という思いから快く協力してくれた。動画の撮影は4月中旬にイタリアで行われ、筆者からの質問を基にイタリア在住のウクライナ人女性が英語でインタビューをし、二人はウクライナ語で答えた。それを英語に翻訳したものを筆者が日本語に翻訳した。英語の学習にもなるように考慮し、英語と日本語、両方の字幕を動画に載せ、ワークショップでは日本語訳を読み上げた。

2-3. 教材メッセージ内容

動画ではウクライナから避難した女性二人が、主にウクライナの現況についてどう感じているか、また戦争が始まったからウクライナでどのように過ごしていたかについて語っている。以下、メッセージの日本語訳の一部である(表1)。

表1 ウクライナから避難した女性二人によるメッセージ(抜粋)

女性 A	女性 B
<p>こんにちは。私達はウクライナから来ました。2月24日の朝4時、全てのウクライナ人が予期していませんでしたが、ロシアが私達の母国ウクライナを攻撃しました。この行動は私を含めて全ての人達にショックを与えました。私達は最初、キーウの家にいましたが、もうこれ以上いることはできませんでした。私の家の窓の下で絶え間なく砲撃、爆撃、ミサイル攻撃、銃撃戦が起これ、私達を温かく迎えてくれた遠い国、イタリアへ移動することを強いられました。これらのことがウクライナとロシア両方を継承している人達によって行われたことは私達にとって大変ショックです。「兄弟」と呼ばれる人達は絶対に攻撃しないだろうと甘く信じていましたが、その願いはむなしく終わりました。私は毎日朝と夜に、ウクライナを守っている人達や私達の国、そして国民のために祈っていました。私達の町は大きな被害を受けましたが、最大の被害はウクライナ国民にもたらされました。人々や子供達は虐待や強姦、非人道的な拷問を受けました。私達はウクライナが、ウクライナの社会で決められた、私達の憲法に書かれた民主主義の輝かしい豊かな未来があると願っていました。私達の願いは即座に壊されました。</p> <p>私の場合、家に地下のシェルターがなかったので、ミサイルが外れることを願ってアパートにいました。きれいな服を着て、正常な状態を保ち、この困難な時に人間でいるようにしました。私は国を去ったので、少し裏切者になった気持ちがあります。毎日、国に戻るように、私達の国を再建できるように祈っています。</p> <p>皆さんに心から感謝の気持ち、そして困難な時に支えてくれた日本、他人の痛みや損失を分かってくれる人達に、ウクライナの大きな愛を送ります。心からありがとうございます。</p>	<p>避難する前、私達はキーウに20日間いて、自衛隊の形成や、誰もいない道路、閉められた店などを見ました。一日3回から5回、アパートの地下にあるシェルター(図1)に隠れないといけませんでした。他の人達は、家族、子供達、ペットまでも一緒に空襲から逃れるために地下鉄に行きました。昼も夜も5分おきにサイレンが聞こえ、とても怖い時間でした。キーウは大きく破壊され、キーウ近郊の町はこの戦争の恐ろしい影響を受けました。これらの小さな町では沢山の人が殺され、家やアパートなどの建物、町が完全に破壊されました。これらの恐ろしい事態は感情的に処理するのが難しかったです。私は体調悪化のため、小さな可能性にかけてキーウのアパートから避難しました。</p> <p>まずはウクライナの西部に行かなければなりません。数日間そこに滞在した後、イタリアのようなもっと安全な場所に移ることを決めました。私達はハンガリーのブダペストを通って行きました。それは一日ではなく数日間かかる、とても困難な旅でした。ウクライナの男性はウクライナを守るために軍隊に入って国に残り、何千人ものウクライナの女性や子供達が家を離れ、他の国々へ避難しなければならなかったからです。</p>

図1 地下シェルター内の写真（女性B撮影）



2-4. 教材作成にあたっての留意点

この教材は、学生にウクライナ人の「生の声」を伝え、ウクライナの現状を知ってもらうために作成したものであったが、偏った意見を伝えないように、そして学生が一つの国自体や国民に対する偏見を持たないように最大限の注意を払った。学生がウクライナの現況やウクライナ人の言葉を一つのメッセージとして受け止め、自分自身でよく考えるきっかけとなるように配慮した。

授業のトピックや教材選択には、倫理的な配慮が必要である。Deckert (2004) は、Kitchener (1984) が示した心理学の分野における5つの倫理的原則に基づき、ESL (English as a Second Language) の授業トピック選択のための5つのガイドラインをまとめている。ESLのクラスには様々な国から、宗教や習慣、価値観など全てにおいて多様な学生が集まっているため、トピックの選択には細心の注意が必要とされる。ガイドラインの一つに“Materials should feature topics that relate to students’ shared interests.” (Deckert 2004, p. 80) (教材は学生共通の関心のあるトピックにするべきである) (筆者訳) とあり、Deckert は “It is now well established that learners are able to gain knowledge of the world and many academic subjects through the avenue of ESL content instruction.” (ibid.) (ESLのコンテンツの指導を通して学習者が世界や多くの学術的な科目に関する知識を得られることは今、十分に確立されている) (筆者訳) と説明している。このDeckertによるガイドラインはESLクラスのためのものであるが、他の授業においても適用することができる。特に、このワークショップは英語コミュニケーションの授業の一環として催されたものであり、英語のクラスという意味では共通点がある。ウクライナのニュースはワークショップが行われた4月の時点で日本でも大きく報道され、学生の多くが関心を持つトピックであったと推測する。そしてこのワークショップを通して、学生は “knowledge of the world” (世界に関する知識) を得ることができた。配慮しなければならないのは、Deckertがガイドラインで最後に挙げた

“Materials should promote mutual respect toward the world and life views of others.” (ibid., p. 83) (教材は他者の世界観や人生観に対する相互尊重を推進するべきである) (筆者訳) という項目である。今回のワークショップが行われた英語クラスは、ESL クラスのように多様な人種や国籍の学生が集まっていたわけではない。しかし、講師の一方的な意見や情報を伝えることによって“mutual respect” (相互尊重) ができなくなってしまうのはワークショップの目的から逸れてしまう。実際に起きていることやウクライナ人が体験した事実は伝えるが、そこに講師の個人的な考えが入らないように留意した。しかしその結果、ウクライナ人の考えや思いの全てを伝えることはできず、授業で時事問題に関するトピックを扱う難しさを実感した。

3. ワークショップ実施後の教材についての考察

3-1. 教材作成からの学び

海外で起きている問題を身近なこととして感じることは容易ではない。しかしワークショップ後の学生のレポートから、学生が自分達に発信された「生の声」を聞くことによって、ニュースで見ていた他国の出来事を身近に感じる事ができた様子が見受けられた。この教材は、国立音楽大学の国際性向上ワークショップ参加者のために作られた、メッセージ性のあるものだった。そのため、通常のテキストよりも学生の心に訴えかける力があつたと考えられる。またこのワークショップは多くの学生にとって、自分のアイデンティティについて考えるきっかけになったようである。

ロシアによるウクライナ侵攻はあらゆるニュースで報道され、学生が関心のあるトピックという前提で教材作成を行った。しかし、学生全員が関心を持っていたとは限らない。中にはこのニュースに関して、あるいは世界情勢そのものに無関心な学生もいたかもしれない。そして元々、ウクライナという国自体の知識がある学生は少なかつたろう。ウクライナについて、そしてウクライナとロシアの関係性や歴史的背景、またこの戦争に至つた経緯についての説明も教材に含める必要があつた。

また教材の使い方として、今回のワークショップでは、動画を見せることで学生達が何かを感じ取り、学生自身が考えてくれることを期待した。しかし、能動的学習を促せるような議論や発表を取り入れることによって、教材をより活かすことができたかもしれない。

3-2. 今後のワークショップ・教材の検討

授業やワークショップにおいて、学生によるプレゼンテーションやディスカッションを取り入れることにより学生に能動的な学習を促すことができるが、同時に教材自体がアクティブラーニングを促すものになるように工夫することも可能である。今回の教材作成にあたり、メッセージを一方的に伝えるだけでなく「あなたはどう感じますか？ あなたがこのシチュエーションに置かれたらどうしますか？ どう行動しますか？ 世界に何を伝えたいですか？」などの発問を動画の中に入れることによって、能動的な学習を促すと同時に、学生の思考力をより働かせることも可能だと考えられる。中西・安藤は、「インプット活動は『考えさせている』のではなく、知識を与えている」とらえる。教師がアウトプットを求める時には、学習者は自分の記憶(知識・体験)から取り出したり、発問に合うように新たに考え出す。この時に、認知プロセス領域が促される」と述べている(中西・安藤 2018, p. 17)。

上述の発問に対する答えをワークショップ内で発表させる他、各学生の意見をメッセージ動画として送るツールを教材に加えることができれば、メッセージを受け取るだけでなく自身も発信するというプロセスを通して、学生の学びを深めることができる。そしてそれは他国の人とコミュニケーションを取ることに自信にも繋がるのではないだろうか。実際、ワークショップの最後に、メッセージ動画に対する御礼とウクライナ人女性一人の誕生日祝いのメッセージとして、“Thank you for the video! Happy Birthday!” と学生全員で短い動画を撮影したが、それまでの受け身の態度とは違い、学生から生き生きとした表情が見られた。

音楽大学の学生にとって最も心に響くのは音楽，そして音楽に関わる話や体験だろう。今後，日本に避難しているウクライナ出身の音楽家を招き，ウクライナの音楽教育の話やウクライナ作曲家の作品の演奏，更に学生とのディスカッションや学生によるプレゼンテーションを取り入れたワークショップも検討したい。

Deardorff は，異文化間能力が個人 (Individual) レベルから相互作用 (Interaction) のレベルに移行する「異文化間能力のプロセスモデル」(Deardorff が2004年に考案) を示している (Deardorff 2004, p. 198; 2006, p. 256)。このプロセスモデルでは，上述した異文化間能力の基本である「尊重」，「開放性」，「好奇心と発見」といった個人レベルの姿勢から始まり，「知識と理解」(文化的自己認識など) や「スキル」(聴く，観察する，評価するなど) を経て，相互作用のレベルである「内的な成果 (Internal Outcome)」(適応性，柔軟性など) や「外的な成果 (External Outcome)」(異文化間の状況においての効果的で適切なコミュニケーションや態度) といった能力へと発達していくプロセス・サイクルが示されている。以下に，Deardorff が挙げた異文化間能力の要素 (Deardorff 2006, pp. 249-250) の一部とプロセスモデルを基にした，今回のワークショップ教材 (ウクライナ人女性二人によるメッセージ動画) と今後のワークショップ・教材案 (学生による議論や発表，各学生によるメッセージ動画作成ツール，ウクライナ人音楽家とのワークショップ) において育成することが可能と考えられる異文化間能力要素の本稿筆者の見解を示す (表2)。Deardorff は異文化間能力の「継続的な発達プロセス」(Deardorff 2006, p. 257) を示しており，異文化間能力は一度のワークショップで発達できるものではない。しかし，具体的にどのような能力やスキルの育成が可能であり目的とするか，そして何が足りないかを把握することで，学生の異文化間能力の発達，そして国際性向上のためのワークショップ改善に向けた，より効果的な取り組みが可能となる。⁽¹⁾

表2 Deardorff による異文化間能力要素とプロセスモデルを基にした，ワークショップ・教材における異文化間能力育成の見解

	ワークショップ教材ウクライナ人女性二人によるメッセージ動画)	学生による議論，発表 (案)	各学生によるメッセージ動画作成ツール (案)	ウクライナ人音楽家とのワークショップ (案)
異文化間能力要素				
(個人レベル・姿勢)				
開放性	○	○		○
尊重	○	○		○
好奇心，発見	○	○		○
(個人レベル・知識，理解)				
文化的自己認識	○	○	○	○
文化に関する深い知識と理解	○	○	○	○
他者の世界観への理解	○	○		○
(個人レベル・スキル)				
聴く，観察するスキル	○	○		○
分析，解釈，関連付けるスキル	○	○	(○)	○
(相互作用レベル・内的成果)				
適応性		○		○
柔軟性		○		○
民族相対的な見解	○			○
共感力	○	○		○
(相互作用レベル・外的成果)				
異文化間での効果的で適切な態度			○	○
異文化間での効果的で適切なコミュニケーション				○

今回のワークショップ教材は、個人レベルの異文化間能力の発達を促すことは可能であるが、相互作用レベルの能力においては限られている。学生による議論や発表をワークショップに取り入れることで、適応性や柔軟性も育成することが可能になる。また学生によるメッセージ動画作成ツールを教材に加えることにより「異文化間での効果的で適切な態度」は育成できるが、双方向の対話ではないため、コミュニケーション能力を育成することは難しい。一方、ウクライナ人音楽家とのワークショップ案においては、ウクライナ人音楽家からの話や演奏に加え、学生による発表やウクライナ人音楽家も交えた議論を行うことで、上記全ての要素の育成を目的とすることができる。実際にこれらの能力要素を育成することができるかは、ワークショップの実施方法や教材の使用法、指導方法、学生の資質など、様々な条件や環境によって異なるだろう。この見解は、Deardorff (2006) が挙げた異文化間能力要素の中から、今回の教材やワークショップ案で育成することが可能と考えられるものを抜粋して分析したものである。その他の能力要素も育成できるような授業や教材の検討が必要である。

4. 時事英語の教材としての検討

国際社会で生きていく上で、ある程度の英語力は必要である。今回のワークショップでは時間の制限もあり、英語訳を字幕として付けるだけであったが、この教材は国際性向上のためだけでなく、ウクライナ語は勿論のこと、英語の教材として使うことも可能である。近年、時事問題を教材として取り入れた時事英語の授業はあらゆる教育機関において頻繁に行われている。岩井は、「国際社会」で活躍するために必要な英語力は「専門分野に必要な英語」「社会人にとっての日常英語」に加えて、「広範で高度な教養英語」であり、「社会や文化を時事のおよび歴史的な面から理解し、それについて外国人と語りあったり、自分の考えを文章にしたりすることができるような英語力である」(岩井 2019, p. 67) と述べている。そして「『広範で高度な教養英語』を合理的に教えるには直近の話題を扱う『時事英語』の授業を設置するべきである」と提案している(岩井 2019, p. 63)。更に、「自ら分析・構築した情報の発信能力を育成」するためには、「最新の時事的な話題を英語でプレゼンテーションしたり、ディスカッションをしたり、レポートを書いたりする発信型の授業を組み合わせる必要がある」(岩井 2019, p. 72) とも述べている。

今回のワークショップのために作成した教材も、国際社会で生きていく上で必要とされる英語力を育成するための教材として使用することが可能である。「発信型」の授業内容を取り入れた時事英語教材の使用法として次の手順が考えられる(表3)。

表3 時事英語教材としての使用方法(案)

<p>課題1</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 英語字幕のみで動画を見る。 2. 動画終了後、配布された英語字幕のプリントを読みながら内容を振り返る。 3. 英語で動画内容の要約を書く。 4. 動画内容の感想や意見を英語で書く。 5. 授業内で発表およびディスカッションを行う。 <p>課題2</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 3-2で記述した発問に対する答えを英語で書く。 2. 授業内で発表およびディスカッションを行う。 3. 発表した答えを基に、英語のメッセージ動画を作成する。
--

5. まとめ

今日、実際に外国に行かなくても、インターネットやマスメディアを通して、海外の情報を簡単に入手することができる。それらの情報を基に、海外に興味を持つ学生は多いだろう。しかし、興味があるということが自動的に国際意識を持つということに繋がるわけではない。漠然と興味を持つだけではなく、そこから自身の体験や思考プロセスを経て、初めて国際意識を持つことができるのではないだろうか。とは言え、国内でそれを実現するのは容易ではない。そういった意味でも、国際性向上のためのワークショップは有意義だと考えられる。今回のワークショップを行うにあたり、90分という限られた時間の中で、学生が他国の人々や他国で起きている出来事を身近に感じ、他者のアイデンティティを尊重する姿勢、そして国際意識を持つことを目指した教材作成を行った。この教材の特徴や、教材作成からの気づきをまとめる。

まず、この教材は学生のために特別に作成されたメッセージ性のあるものであった。ゆえに多くの学生がウクライナ人やウクライナで起きていることをより身近に感じられたようだ。次に、この教材のトピックは多くの人々にとって関心度の高い時事問題であった。学生が関心を持つ世界の時事問題をトピックとして授業を行うことは、学生の学習意欲を高め、国際的視野を広げることに繋がる。しかし、授業トピックの選択には、常に倫理的配慮が必要であり、特に時事問題においては細心の注意が必要とされる。

教材の改善点として、教材自体が学生に能動的学習姿勢を促し、発信力育成に繋がるような工夫が必要だと考えられる。教材に学生の思考力をより働かせるような発問を含める他、メッセージを受け取るだけでなく、各学生が発信できるようなツールを加えることで、異文化の人々とコミュニケーションを取ることへの意欲を高められる。また教材やワークショップにおいて、具体的にどのような異文化間能力を育成したいか考えることにより、学生の異文化間能力を効果的に育成することができるだろう。

この教材は時事英語の教材として活用することも可能である。英語での発表や議論を授業に取り入れることにより、学生は国際社会において必要な英語を学習できると同時に、他の学生の意見を聞き、自分の考えを更に深めることができる。それは他者のアイデンティティを尊重し、自己のアイデンティティを模索し、確立していくことにも繋がると言える。

音楽はコミュニケーションツールと言われることが多い。音楽大学の学生にとって、様々な国の人とコミュニケーションを取ることは、学生の専攻、そして人生の貴重な学びとなるに違いない。考え方やアイデンティティは、日々、置かれた環境や出会った人達、そして遭遇した出来事など、様々な要因によって変化していくものである。学生の成長そして国際性向上に導ける、インタラクティブな、より良い教材や授業内容を研究していきたい。

謝辞

ワークショップの実施および本稿の執筆にあたりご指導頂きました中西千春教授に、心より感謝申し上げます。

註

(1) Deardorffの異文化間能力の要素やプロセスモデルの用語・説明の和訳は本稿筆者によるものである。

参考文献

- 足立恭則 (2010). 「大学学部課程における海外留学の教育的価値とカリキュラムにおける位置づけ」, 東洋英和女学院大学『人文・社会科学論集』, 第28号, pp. 77-91.
- 岩井茂昭 (2019). 「大学において教えるべき英語についての考察」, 『生駒経済論叢』, 第17巻第2号, pp. 63(105) -73(115).
- 中西千春・安藤香織 (2018). 「英語授業における思考力を育成する発問」, 『国際教育研究所紀要』, 第24号, pp. 16-27.
- Chickering, A.W., & Reisser, L. (1993). *Education and Identity* (2nd ed.). San Francisco: Jossey-Bass.

- Deardorff, D. K. (2004). "The Identification and Assessment of Intercultural Competence as a Student Outcome of International Education at Institutions of Higher Education in the United States". Unpublished dissertation, North Carolina State University, Raleigh.
- Deardorff, D. K. (2006). "Identification and Assessment of Intercultural Competence as a Student Outcome of Internationalization", *Journal of Studies in International Education*, Fall 2006, Vol. 10, No. 3, pp. 241-266.
- Deckert, G. (2004). "Guidelines for the Selection of Topical Content in ESL Programs", *TESL Canada Journal*, Special Issue No. 4, pp. 73-88.
- Evans, N. J. (2003). "Psychosocial, Cognitive, and Typological Perspectives on Student Development". In S. R. Komives, D. B. Woodard, Jr., & Associates, *Student Services: A Handbook for the Profession* (4th ed., pp. 179-202). San Francisco: Jossey-Bass.
- Kitchener, K. S. (1984). "Intuition, Critical Evaluation and Ethical Principles: The Foundation for Ethical Decisions in Counseling Psychology", *The Counseling Psychologist*, Vol. 12, Issue 3, pp. 43-55.